

逆数秘術（アンビバレント・ヌメロロジー） 未完

※本原稿の著作権は数秘術汎論：後藤貴司に帰属する

※本原稿の改変、著作権者の許諾無き転載及び使用を禁ずる

■はじめに

かのピュタゴラスから始まったとされる数秘術。そこから約 2,500 年の時を経て、バリエッタが生み出した現代数秘術（モダン・ヌメロロジー）。この二つに共通するのは「全ては数である」という大原則であり、数秘術とは何らかのイメージをまとった「数」によって、ヒトも含めた森羅万象の意味や在り方を見つめ直すという「哲学的作業」であるともいえる（なお上記の数秘術や現代数秘術についての詳しい解説は、他の書物に委ねることとする）。

本書にて紹介する**逆数秘術（アンビバレント・ヌメロロジー）**は、現代数秘術における「数」のイメージに「対」という観念を与え、更にそれをシンメトリック（対称性）な形に調えることで生まれた全く新しい数秘術である。これは従来の現代数秘術（モダン・ヌメロロジー）で見られるような「チャート」、つまりは生年月日や氏名などのような個人を表す情報から何種類もの「数」を導き出すのではなく、生年月日から導き出した「基本数」と、それに対して自動的に割り振られる「逆数」（「基本数」とは真逆のイメージとなる）の二種類の「数」のみを用いて、よりシンプルに、より深く本質へと迫るリーディングを試みることができる理論である。

そして英訳として掲げている「アンビバレント」という語だが、これは「相反する感情や考え方を心に抱く様」を表しており、上記で示した「基本数」と「逆数」という相反する「対」のイメージの「数」が、一人のヒトの中で織り成す「ジレンマ」をシンプルに表現できる理論であることから付けられた語である。

例えば自らの中で「守りたい」という気持ちと「壊したい」という気持ち、それぞれ相反する思いが同居しており、この両者が時には激しくぶつかり合い、また時にはどちらか一方が息を潜めて隠れたり、あるいは共に手を取り合って和解したり、などのようなドラマが展開されていく…このような心の中の「ジレンマ」や、それに付随する心境の変化を表現していく理論、それが**逆数秘術（アンビバレント・ヌメロロジー）**なのである。

本書では、その技法について詳しく紹介するとともに、単なる生年月日を用いた「占い」的な使用法を超えた「哲学」的使用法についても紹介していきたいと思う。本書の購読を機に「占いとしての数秘術」から脱皮し、より「哲学としての数秘術」へと近づいていってもらえると、著者としてはとても嬉しい限りである。

■「基本数」の出し方

逆数秘術（アンビバレント・ヌメロロジー）を用いるにあたり、まず初めに行うのが当人の生年月日から「基本数」を導き出すという作業である。現代数秘術に触れたことのあるヒトであれば造作もないことではあるが、念のためその計算法を紹介しておくでしょう。

例えば 1976 年 10 月 16 日生まれ（これは著者の生年月日である）のヒトの場合

$$1+9+7+6+1+0+1+6=31 \quad 3+1=「4」$$

上記のように計算し、最終的に一桁の数（ルートナンバー）を出すことで「基本数」が導き出される（この計算法のことを単数変換という）。

ちなみにこの計算は以下のように行っても問題はない。

$$1976+10+16=2002 \quad 2+0+0+2=「4」$$

最終的に同じ「基本数」となる。

なお、この単数変換の際は「9」を省略しても構わない。つまり「9」を「0」とみなしてもよい（この「9」を省略する計算法を九去法という）。

例 1999 年 9 月 9 日生まれのヒトの場合

$$1+9+9+9+9+9=46 \quad 4+6=10 \quad 1+0=「1」$$

↓

$$1+0+0+0+0+0=「1」$$

このように「9」を「0」に置き換えても、同じ「基本数」となることがわかる。

■ 「逆数」の出し方

上記のやり方で「基本数」を出したなら、あとは自動的に「逆数」を導き出せる。

$$「1」 \Leftrightarrow 「8」$$

$$「2」 \Leftrightarrow 「7」$$

$$「3」 \Leftrightarrow 「6」$$

$$「4」 \Leftrightarrow 「5」$$

$$「9」 \Leftrightarrow 「0」$$

つまりは「9」から「基本数」を引けば「逆数」を導き出せる。

■「数」のイメージと一覧表

次項において**逆数秘術（アンビバレント・ヌメロロジー）**で用いる「数」のイメージ一覧表を紹介するが、この理論では「1」「3」「5」「7」を**奇数**（動的・混沌・チカラ）、「2」「4」「6」「8」を**偶数**（静的・秩序・カタチ）として扱っている。

その一方で、数学的には奇数となる「9」は**奇数でもあり偶数でもある数**として扱い、数学的には偶数となる「0」は**奇数でも偶数でもない数**として扱っている。

「9」は「1（数学では素数扱いされない）」以外の奇数である「3」「5」「7」が素数（「1」と自分自身でしか割り切れない数）であるのに対し、「3」でも割り切れる「9」は合成数となり、偶数である「4」「6」「8」も同じ合成数となる（「2」は数学では素数）。また現代数秘術においては「9」に「全て」というイメージがあり（「1」から「8」までのイメージ全てを内包している）、これらの理由から本理論では「9」を奇数（動的・混沌・チカラ）と偶数（静的・秩序・カタチ）両方のイメージを内包している数と定義している。

そのため「9」の「逆数」となる「0」には、まさに「全」と対をなし得る「無」として、奇数（動的・混沌・チカラ）でも偶数（静的・秩序・カタチ）でもないイメージを与えている。

またそれぞれの「数」には四大元素の「火」「水」「土」「風」、そしてユングの類型論における「直観」「感情」「感覚」「思考」を当てはめている。また奇数（動的・混沌・チカラ）には「**動く（荒ぶる）**」、対する偶数（静的・秩序・カタチ）には「**静まる（鎮める）**」というイメージも与えているため、例えば「1」は「動の火」「荒ぶる直観」、「6」は「静の水」「鎮める感情」などと名付けることで、それぞれの「数」をよりイメージしやすくなっている。

それぞれの「数」には、その意味となり得るワードが並んでいるが、それらは対となる「数」のワードと基本的には対称を成しており、例えば「1」の先頭にある「自尊」は、対となる「8」の「自罰」と対称を成しているし、「9」の「どちらでもいい」は「0」の「どうでもいい」と対を成している。

なお、今後は「1」と「8」、「3」と「6」などのように、対となる「数」同士のコンビで、それぞれの「数」のイメージを解説していく。その方が「数」のイメージを覚えやすくなるし、ヒトの性質だけではなく社会現象などを考察する際に、対となる「数」同士が織り成す「**コントラスト（対比）**」が最も重要なポイントとなるからである。

それらを踏まえた上で、次項の一覧表を見てもらいたい。

奇数 (odd)		←
ダイナミック (動的) ・カオス (混沌) ・チカラ・荒ぶる者		
自尊 衝動 発作的 猛進 権利 個人 王様 世界の開拓者 ケモノ 単一 野性 権威無視 根拠のない自信 即決 フリーダム 欲求 単純	1	← Soul
「律」から自らを解放し、オリジナルの尊厳を取り戻す	動の火	直観
表現 生産 アート 感情発露 自己愛 無恥 奔放 遊興 仁愛 動的調和 放任 不揃い 楽観的 無駄 放埒 生みの親 趣味 広める	3	← Mind
あえて「美」からはみ出ること、自由を生み出す	動の水	感情
変化 刷新 革命 破壊 冒険 破戒 移転 鋭敏 更新 投機 アドホック (特別) 多動 予防攻撃 社会に抗う 「壁」を壊す 好奇心	5	← Body
「壁」を破り出て、束縛物から自らを遠ざける	動の土	感覚
検証 非言語的思考 洞察 孤高 哲学 異質 懐疑 神経質 知恵 意味の解体 確認 独自 「独り」を大切にす 思考過多 情報分析 精神世界	7	← Brain
安易に「線」を引かず、しっかりと検証を重ねていく	動の風	思考
奇数でもあり偶数でもある数 カオスモス オールマイティ 「空 (くう)」 : 全ては因縁で満ち、自我・実体等はない 全てのことを時の流れに委ね、自然に忘れていく この世界には「意味」を自由に与えることができる	9	四大の統合 中庸
⇕		
奇数でも偶数でもない数 ・ ナッシングネス 「空 (から)」 : 一種の虚無主義 (ニヒリズム) 主体である自らが消えようとし、忘れられようとする この世界には「意味」など全く存在しない	0	虚無 忘却

		偶数 (even)		
		スタティック (静的) ・コスモス (秩序) ・カタチ・鎮める者		
	8	火	静の火	<p>自罰 抑制 計画的 抑止 義務 組織 法律 世界の運営者 マシン 集合 理性 権威重視 実績に伴う自信 熟慮 コントロール 忍耐 複雑</p> <p>多くの「律」に従い、良きツールとして励んでいく</p>
	6	水	静の水	<p>秘匿 調整 デザイン 感情抑制 他者愛 羞恥 自粛 奉仕 礼儀 静的調和 責任 均質 悲観的 効率 倫理 育ての親 教育 助ける</p> <p>様々な「美」に則り、あらゆるものを調べていく</p>
	4	土	静の土	<p>安定 継続 保守 建築 安全 順守 安住 鈍麻 維持 蓄積 ルーティン (日課) 不動 専守防衛 社会に従う 「壁」を築く 警戒心</p> <p>ルールや領分などの「壁」の中で自らを守り抜く</p>
	2	風	静の風	<p>信頼 言語的思考 観察 連携 信仰 同質 拒絶 依存性 知識 意味の構築 分類 比較 「絆」を大切にする 思考停止 情報収集 現実世界</p> <p>自他を繋ぐ (分ける) 「線」を明確に引いていく</p>
9		全て 自然 宇宙		<p>曖昧模糊 無為自然 無我 (自他一体) 汎個性 多様性 遍在 完全 寛大 鷹揚 博愛 放棄 混交 終焉 天然 充溢 醸成 飄々とした 赦し 断捨離に拘らない どうでもいい 明るい諦め</p>
0		滅却 消失		<p>無色透明 無意無然 忘我 (自己消失) 無個性 全てが「無」へと帰していくイメージ リセット願望 無感情 無反応 無行動 消滅への期待 無力感 病的な断捨離 どうでもいい 暗い (冷めた) 諦め</p>

■ 奇数と偶数、リーディングのポイントについて

逆数秘術（アンビバレント・ヌメロロジー）においては、ヒトの性質にしても何にしても、それが**奇数（動的・混沌・チカラ）**的なのか**偶数（静的・秩序・カタチ）**的なのかを評価するところが、最初の大事なポイントとなる。そしてこのことは本理論を用いてヒトをリーディングする際にも、極めて大事なポイントとなる。

奇数（動的・混沌・チカラ）とは、ヒトやモノがよりダイナミック（動的）であり、自他にカオス（混沌）をもたらし、瞬発的に発揮されるチカラとして存在する、などのイメージとなる。

対する偶数（静的・秩序・カタチ）とは、ヒトやモノがよりスタティック（静的）であり、自他にコスモス（秩序）をもたらし、持続的に構築されるカタチとして存在する、などのイメージとなる。

この両極的な二つの概念を用いて、ヒトの性質や環境の状況などをラベリングしていくが、両者が混じり合ったもの（例えば多様性など）は、奇数でも偶数でもある「9」として扱い、逆に奇数でも偶数でもないもの（例えば二ヒリズムなど）は、奇数でも偶数でもない「0」として扱っていく。

このように奇数（動的・混沌・チカラ）か偶数（静的・秩序・カタチ）か（またはそれ以外か）を判別していくことは、生年月日から導き出した「基本数」を用いたリーディングにおいても同じなのだが、これは別にそのヒトを「奇数のヒト」「偶数のヒト」などのように断定させるものではない。なぜならばヒトは奇数性も偶数性も、更には「9」も「0」も、もともと全ての「数」の要素を持ち合わせているからだ。

そのため、あくまでも「全ての「数」で構成された中から「基本数」と「逆数」という「双子の数」をピックアップし、そのヒトの性質分析を試みる」という観点からリーディングを行う。

例えば「基本数」が「3」のヒトの場合、その「逆数」は「6」であり、このヒトは「3」と「6」という言わば「双子の数」を持っている、というようにリーディングし始めることとなる。また「基本数」が「6」のヒトの場合も、その「逆数」は「3」となることから、このヒトも「6」と「3」という「双子の数」を持っている、という表現となる。

この場合、どちらも同じ「数」の持ち主ということになるが、そのヒトの中の「3」が出やすいか「6」が出やすいかで、その性質は大きく異なってくる。

そしてここが一番大事なのだが、どちらの「数」が出やすいかどうかを決めるのは、本人が元来持つ性質よりも、**生まれてから現在までの環境**である。

逆数秘術（アンビバレント・ヌメロロジー）的に表現するならば、ヒトとは本来「9」的な存在、つまりは全ての「数」のイメージを内包した存在（これには「0」も含む）であり、そのヒトを取り巻く環境からは様々な刺激を受け、それに対して様々な反応を返していくわけだが、これがある一定のパターンとなったものがいわゆる「性格」と呼ばれるものとなる。

つまり同じ「3」のヒトであったとしても、相反する「6」的な刺激が環境の側から与えられた際、それに反抗するような形で「3」的な反応を返すヒトもいれば、素直に従うかのように「6」的な恭順さで反応を返すヒトもいる。この反応の違いは与えられた刺激に対して**当人がどのように評価しているのか**で大きく変わってくる。

ここで再び奇数（動的・混沌・チカラ）と偶数（静的・秩序・カタチ）の話に戻るが、例えば「3」のヒトが奇数的な状況、つまりはどんな自己表現をしても恥ずかしくないようなカオスな状況を「よし」と評価するならば、同じ「3」的な刺激が与えられた際には嬉々として「3」的な反応を示すことだろう。

しかし同じ「3」のヒトが「逆数」である「6」という偶数的な状況、つまりは大人げないことを決して許さないような倫理秩序が厳格な状況を「よし」とするならば、上記と同じ「3」的な刺激が与えられたとしても、当人はそれに反する形で「6」的な対応（相手をたしなめる、羞恥心を発揮するなど）を返すことだろう。

このように、例え同じ「数」のヒトであっても、奇数（動的・混沌・チカラ）を「よし」とするか、偶数（静的・秩序・カタチ）を「よし」とするかで、その反応は大きく変わる事となる。

もし目の前に「3」のヒトが現れたとして、以下のような「性格」のパターンが考えられる。

- ①「3」的なものを「よし」とする
- ②「6」的なものを「よし」とする
- ③「3」的なものを「よし」とし、「6」的なものを「よし」としない
- ④「6」的なものを「よし」とし、「3」的なものを「よし」としない
- ⑤どちらにも特にこだわらないし、反応そのものも曖昧（つまり「9」的）
- ⑥自らも含め、周りの全てがどうでもいい（つまり「0」的）

この「3」のヒトが極めて「6」的な環境（門限・教育に厳格な家庭）に育ち、更に周囲に「3」的な行動（ルールに抗い、そしてはみ出す）を唆すような友人がいたならば、上記の③的な「性格」となるかもしれない。

でも同じ「3」のヒトが大人になり、自らに子供ができ、そんな中で「子供には若かりし頃の自分と同じ轍を踏ませたくない」などと考えたなら、そのヒトの「性格」はきつと

④的なものへと変質していくことだろう。

つまり同じ「3」のヒトであっても、状況や環境の違いによって「3」が前面に出たり、その逆に「6」が前面に出たりと変わってくるというわけだ。

そのため**逆数秘術（アンビバレント・ヌメロロジー）**でリーディングする際には「**相談者がどのような環境にいて、そこからの刺激に対してどのような反応を返していたか**」を確認するヒアリングを最重視している。ただしこれには相談者の生育環境等も含めたセンシティブな情報のヒアリングが伴うため、あくまでも相談者との時間をかけたラポール形成が前提条件となることに注意を要する。

もちろんそこまでのことをヒアリングしなくても、相談者の「基本数」と「逆数」を用いながらリーディングしていくことは可能だが、より深いリーディングを行うには上記のヒアリングが必要となることだろう。

その際には、相談者が育ってきた文化が奇数（動的・混沌・チカラ）的なのか、はたまた偶数（静的・秩序・カタチ）的なのか、これをまずは大雑把に捉えてみるのが肝要となる。

例えば日本の場合、世界的に見ればとても偶数（静的・秩序・カタチ）寄りな文化であると捉えることができる。つまりは他者との約束や関係を重んじる「2」、領分や継続を重んじる「4」、責任や奉仕を重んじる「6」、自制や忍耐を重んじる「8」などで示される偶数性を発揮した方が、学校・会社組織等、一般社会において評価されやすくなる文化ともいえる。もちろん、これは日本に限った話ではないが、少なくとも日本においては特にこの偶数性を重んじる姿勢が強いため、必然的に日本社会で生きるヒトの偶数（静的・秩序・カタチ）が強くなりやすくなる。

そしてそれは同時に相反する奇数（動的・混沌・チカラ）を前面に出しにくい構造を生み出すこととなる。奇数性を前面に押し出すヒトは、偶数的な秩序を重んじるヒトからすれば、これまで頑張って維持し続けてきた秩序を破壊する、実に危険な存在として映ることだろう。

そんな偶数優位な社会において評価されるために、自らの奇数性を封印したり、断罪したり、更には忌避するヒトも現れることとなる。それらアンチ奇数性は社会人になってから形成されることもあれば、幼い頃に自らの奇数性、つまりは独断専行や命令無視という「1」、無恥な表現や規範の逸脱という「3」、過度な冒険性や過激な反抗心という「5」、常識への懐疑や精神世界への没入という「7」、これらを親などから必要以上に（特に理由の説明もなく理不尽な形で）たしなめられたり叱られたりすることで「そうか…これは悪いことなんだな…」などと萎縮し、健全な奇数性の育成が阻害されるケースもある。

そのため**逆数秘術（アンビバレント・ヌメロロジー）**でのリーディングにおいては、相

談者が封印・断罪・忌避してきた**奇数性の復権**が主眼となることも少なくない。

一方で、そんな偶数まみれな社会に反旗を翻し、奇数性を貴び重んじるヒトも存在するが、そういうヒトは早くに海外への脱出を果たしていたり、奇抜な専門家として一般社会とは異なるルールの中で活躍していたり、更には偶数性が支配する社会の中で「変人」のレッテルを貼られながらも頑張っているヒトもいる。

そういったヒトに対して、リーディングを通じてわざわざ偶数性の大切さを教えたりすることはしない（それはもう日本の学校教育で散々叩きこまれてきたはずだから）、むしろ相談者の奇数性を存分に発揮できる環境への移動を勧めたりもする。

■まずは足して「9」を目指す

先述の通り、**逆数秘術（アンビバレント・ヌメロロジー）**でのリーディングにおいては、まず初めに当人における奇数（動的・混沌・チカラ）と偶数（静的・秩序・カタチ）の価値の違いを確かめ、そしてその両者のバランスを取ることを重視していく。

例えば「1」のヒトであれば、まずは「逆数」である「8」とのバランスを取っていくことを意識すると共に、自らの中での「1」と「8」の価値の違いを明確にしていく。もし「1」が断罪されているならば、それを少しずつ赦していくことにより、対となる「8」との和解を模索し、強過ぎる「8」の弱体化を図っていく。

最終的には「1」と「8」を足し合わせた「9」、つまりは**緩やかな統合**を目指していくこととなる。この「9」のイメージについては後ほど詳述するが、ここでは簡単に「**奇数性も偶数性も事を荒立てずに、共に存在を赦していく**」数と表現しておこう。

自らの中の奇数（動的・混沌・チカラ）と偶数（静的・秩序・カタチ）とが互いにシーソーゲームを演じる中、あるヒトはその激しい動きに翻弄され、またあるヒトはどちらか片方の価値が重すぎるために動きが完全に止まってしまったりもする。そんな状況に少しずつバランスをもたらしながら、最終的に奇数と偶数のシーソーゲームをもっと穏やかな動きへと変えていく。それが「9」になっていくということであり、別の言葉で言い換えると「よく老いる」と表現してもよい（一桁最後の数である「9」だからこそのイメージ）。

では、よい意味で「9」な状態となるのが最終地点かと言えば、決してそんなことはない。なぜならば「9」を到達した途端に今度は「逆数」である「0」とのシーソーゲームが始まるからである。そしてもしもこの「9」と「0」のシーソーゲームを平和裏に終わらせることができたなら、それはもう「**真の達観**」というレベルとなることだろう。もちろん、生きているうちに実現できるか否かの領域ではあるが。

なお、本理論を「アンビバレント・ヌメロロジー」と呼称している以上、この緩やかな統合としての「9」とは、つまり「**自らの中の相反する両者の存在を赦す**」ことであり、そしてそれは「**自己矛盾をも赦す**」ということでもある。

同時に相反する思いや願いがあつて当然、自己矛盾していたってそれが当たり前であり、それがとても自然なこと、そんな風に緩く自他を赦していくことが、よい意味での「9」であるといえるだろう。

■ 性質を「数」に喩えるリーディング

今までは当人の生年月日から導き出された「基本数」と「逆数」を用いたリーディングについて簡単に紹介したが、実はこれ以上に大事なリーディング法が存在する。

それは当人が意識する性質を「基本数」代わりに当てはめるリーディング法だ。例えば「1」から「0」まで書かれた先述の一覧表を相談者に見せた際、そのヒトは「7」が自らの性質に最もフィットする「数」であると答えたとする。その場合は「7」を当人の「基本数」として当てはめ、その「逆数」である「2」と共に「双子の数」を自動的に導き出していく。

この方法でリーディングすることにより、生年月日から導き出した「基本数」と「逆数」よりも、更にスピーディかつダイレクトに課題点を探し当てることが可能となる。相談者自身に「数」を選ばせるのは、実に「エニアグラム」的手法であるともいえるが、時間がたっぷりあるならば、ぜひ試してもらいたいリーディング法である。

さて、ここからはいよいよ、それぞれの「数」についての詳しい解説に入るとしよう。なお、それぞれの「数」のイメージを「コントラスト（対比）」の効果で覚えてもらうためにも、「1」と「8」のようにコンビで解説することとする。

■ 「1」と「8」について

点で表される「1」は、始まり・誕生・発生などを表し、生まれたての自我をも表す。また、「1」はそれ以上小さく分割できないため、個人・単体など単一のもの全般も表す。更に「1」を何回掛けても（ $1 \times 1 \times 1 = 1$ ）答えは元の「1」となるため、揺るがない存在感やオリジナリティをも表す。

対する「8」は、空間を安定的に支配する立方体の点の数であり、領域を強固に支配する二重の四角形（二つの「4」）でも表される。更に、安定を意味する「4」の二倍、かつ結合を意味する「2」の三乗であることから、支配・制御・抑制なども表す。また、空間等を強固に支配する様から、力や権力なども表す。

この両者には四大元素における「火」を当てはめており、奇数（動的・混沌・チカラ）である「1」は「動の火」、偶数（静的・秩序・カタチ）である「8」は「静の火」と表現している。

「1」の「動の火」は喩えるなら、何も無い平原に突如として落ちた雷から発生した野火が、まさに燎原の火のごとくカオスに広がっていくイメージであり、突然湧き上がった衝動の赴くままに進もうとする「獣性」の象徴ともいえる。

「8」の「静の火」は喩えるなら、多くのヒトやコンクリート建造物、更にはコンピュータによって十重二十重に囲まれ、徹底的に管理・コントロールされた原子炉の火のイメージであり、極めて冷徹かつ厳密に本能を抑え込む「理性」の象徴ともいえる。

またこの両者には、ユングの類型論における「直観」をあてがっており、更には「soul（魂）」のイメージも与えているが、これは両者における判断の根拠が後述の「感情」と「mind（心）」、「感覚」と「body（体）」、そして「思考」と「brain（脳）」に依らない、つまりは「無根拠」としか説明しようがないくらいに「直接的」であることを表している。

喩えるなら「1」は「根拠なく（何の前触れもなく）踏まれるアクセル」、「8」は「根拠なく（何の前触れもなく）踏まれるブレーキ」、などと表現できる。

一覧表には様々なワードが並んでいるが、奇数である「1」は「**「律」から自らを解放し、オリジナルの尊厳を取り戻す**」、偶数である「8」は「**多くの「律」に従い、良きツールとして励んでいく**」、これらがキーワードとなる。

何かを始めようと思ったら、これといった準備もせずに衝動のままアクションし始めるのが「1」だとすれば、それとは逆に自らを抑制しつつ、ヒトや資金の用意・計画の立案や運営・更にはスケジューリングなどを徹底するのが「8」のイメージとなる。

先述の「律」は言い換えるならば「（自他の定めた）ルール」となるが、そんな「ルール」を無視して行動するのが「1」という「アンチ・コントロール」であり、あくまでも「ルール」に従っていくのが「8」という「アンダー・コントロール」である。

「1」として生きるヒトは、対極である「8」の側（秩序を守る側）から見れば極めて危なっかしい存在となるため、当然ながら叱られたり、激しく指導されたりすることで、その「1」に大きな影響を受けることとなる。

それでもなお、自らの「1」を貫くヒトもいるが、そういったヒトはそう多くなく、実際には自らの「1」を弱めていくことにより、「8」的な（つまり偶数的秩序）ヒトや社会に自らを馴染ませようとする。

問題となるのは、この自らの「1」を過剰に弱めてしまうことにより、何かを始めようとする際に必要となる「自信」の抑制（完全に無くなる「喪失」ではない点がポイント）につながってしまう点である。特に自らの「1」を発揮することで「親や他人に多大な迷惑をかけてしまった」という意識が強くなると、そんな自らの「1」を封印すべく必要以上に自罰的となったり、更には赦されざる「敵」として認定するケースも存在する。

「1」と「8」はコンビであるため、自らの「1」が弱まれば自動的に「8」が強まることとなる。そのため当人の性質は極めて抑制的なものとなり、我慢強く辛抱強く、自らを強く律しながら、自他が定める「ルール」に従っていくこととなる。

自他の「ルール」に厳格に従って生きることは、自らを社会秩序維持のための「ツール」と規定して、その運営のため活動していくことにつながっていく。そんな風に「8」的に生きることは、偶数的な秩序社会における評価や実績につながりやすくなると共に、そこで得られた「8（実績を伴う自信）」は、自ら封印した「1（根拠のない自信）」の代わりとして機能することとなる。

この「8（実績を伴う自信）」とは、言い換えるなら「ブランド」であり、例えば様々な資格・技能・肩書を獲得していくことにもつながっていく。そんな「8（ブランド）」でもって「1（プライド）」の代わりとしていくわけだが、これはあくまでも代替手段であり、もしも自らの中の「1（プライド）」の封印を解除しないまま、資格・技能・肩書などが失われたならば、頑張って築いてきた「8（ブランド）」も一気に失われることとなる。これは即「アイデンティティ」存続の危機につながっていくため、その「8（ブランド）」を構成する資格・技能・肩書だけではなく、当人が獲得してきたヒト（友人・恋人・配偶者など）やモノ（金銭・宝飾品・不動産など）に強く執着することもある。

幼少時に自らの「1」が親などから叱られることにより封印されると、今度は大人になってから対極となる「8」を発揮させ、自らをブランド化することに躍起になるケースは枚挙に暇（いとま）がない。自らの「1（プライド）」が萎縮していなければ、そこまで「8（ブランド）」というカタチに拘る必要はないのだが、周囲の偶数優位な環境の影響を受けることにより、その環境から高く評価されやすい「8（ブランド）」の獲得を目指していく。

もし自らの「1」が萎縮せず、封印も断罪もされなければ、大人になってもその「1」を存分に発揮することが可能となる。この場合は「根拠のない自信」に基づく、極めて自由な活動（はたからは無鉄砲にも見える）が目立つようになる。自身が活動する環境の奇数（動的・混沌・チカラ）性が強ければ（奇数性を強く求められる環境と言い換えてもよい）、その行動は「ヒロイック」なものとして歓迎されることだろう。しかし、その逆に偶数（静的・秩序・カタチ）性が強ければ、そういった行動は認められにくくなるし、指導や矯正の対象ともなり得る。

■ 「3」と「6」について

「3」は三つの点と線で構成される三角形、更には三次元のイメージであり、これらの域内において自由奔放に動き回る様を表す（二点を結ぶ直線では線上の往復運動しかできない）。更に、「1」の男性性と「2」の女性性（これらは従来の数秘術におけるイメージ）が合わさる事で「3」の子供が生まれるため、生産・子供、拡大なども表す。また、一対一の緊張関係を第三者が緩和出来得ることから、仲介や事態の進展をも表す。

対する「6」は、ハニカム構造や雪の結晶などに見られる六角形のイメージとなる。これらは自然が生み出した最も効率的な形（隙間なく領域を埋められて、かつ面積が最大となる）であるため、効率や調整などを表す。また、「6」は数学的に見ても、最小の「完全数（その数自身を除く約数の和が、その数自身と等しい自然数）」であり、美・理想・完璧さも表す。更に、男性性の「1」と女性性の「2」、子供の「3」が合わさって「6」となることから、家庭や家族、そして責任をも表す。

この両者には四大元素における「水」を当てはめており、奇数（動的・混沌・チカラ）である「3」は「動の水」、偶数（静的・秩序・カタチ）である「6」は「静の水」と表現している。

「3」の「動の水」は喩えるなら、子供たちが大声ではしゃぎながら遊ぶような波打ち際や噴水などのイメージであり、恥ずかしげもなく大胆に自らをさらけ出す「無恥」の象徴ともいえる。

「6」の「静の水」は喩えるなら、波一つない凪いだ湖面に周囲の風景がまるで鏡写しのように映り込むイメージであり、美学からはみ出ること（この場合は波立たせること）を恐れ恥じる「羞恥」の象徴ともいえる。

またこの両者には、ユングの類型論における「感情」をあてがっており、更には「mind（心）」のイメージも与えているが、これは両者における判断の根拠が「感情」そして「mind（心）」で表されるような、好悪（好き嫌い）の情がベースとなることを示している。

一覧表には様々なワードが並んでいるが、奇数である「3」は「**あえて「美」からはみ出ること、自由を生み出す**」、偶数である「6」は「**様々な「美」に則り、あらゆるものを調べていく**」、これらがキーワードとなる。

まるで現代アートのように従来の美の秩序から大きくはみ出すと共に、たとえ無益であっても構わずに表現するのが「3（アート）」だとすれば、工業デザインのように美と機能性を兼ねそそえると共に、あくまでもその有益性に拘るのが「6（デザイン）」だとい

える。

たとえ役に立たずとも、そして無意味なように思えても、はばかりことなく出していく「3」と、無益と分かった段階で、そっと内側にしまい込む「6」の違いでもある。

自らの感情のままに表現をしていく「3」は、よくいえば素直で正直な気質であるともいえるが、反面でそれは偶数（静的・秩序・カタチ）的な社会秩序を乱す原因ともなり得る。そのため、親などから「そんな恥ずかしいことをする（言う）のはやめなさい」などと繰り返し指導されることにより、自らの中の「3（無恥）」は封印されていき、その代わりに「もっと大人として恥ずかしくない自分でいなければ」などと意識する「6（羞恥）」が強くなっていく（学校など偶数性の強い環境に放り込まれることにより、羞恥心が植えつけられることも多い）。

「6」とは社会秩序の維持に欠かすことのできない「礼儀」を重んじる数ともいえるのだが、これが強くなり過ぎると今度は、自らの正直な「好悪（好き嫌い）の情」を常に化粧で隠すかのような状態になると共に、そんな自らの素直な心の動きですらも「こんな風に思ってしまう自分は、実にはできていない人間だ」などと強く恥じるようになってしまう。

看護や介護職などを昨今「感情労働」などと表現することがあるが、これはつまり相手を不快にさせないよう細心の注意を払いつつ、自らの感情を美しく調えながら奉仕するイメージとなる。これこそがまさに社会維持にとって必要不可欠な「6」的な労働であるのだが、自らの中の「6」が強過ぎると（併せて「3」を封印したままだと）自己犠牲的な奉仕活動を優先するあまり、それが長期間に及ぶと精神のバランス異常につながることも少なくない。これは特に大災害などが発生した際の医療従事者で顕著になるが、これは自らの「3」がいつも以上に出しにくく（不謹慎などと言われやすくなるため）、かつ「6」でいることを強く求められる環境下に置かれるからだ。

危険な状況から生還したヒトが抱く罪悪感のことを「サバイバーズ・ギルト」というが、この強い罪悪感によってそのヒトの中の「6（奉仕・責任）」が強まり、まさに身を粉にして人助けに邁進するケースもある。これは同時に「3（自己愛・遊興）」の封印や罪悪化につながり、場合によっては「全てのヒトが救われるまで、私は決して楽しい思いをしてはならない」などと、自らを使命感という名のロープで雁字搦めに縛り上げることもある。

こういった「6」が強くなり過ぎたヒトの精神バランスを回復させるためには、対極となる「3」を満たすような行動がヒントとなる。ただ真っ白い紙に、一見カオスに見えるようなパステル画を描いてみたり、カラオケなどで曲の旋律や音程を気にすることなく、大声でシャウトしてみるなど、「6」的な「美の秩序」、つまりは「こうであらねばならない」などという「評価の枠」からはみ出し、子供心を取り戻せるような行動が、自らの中の「3」の復権につながっていく。

「6」が強過ぎるヒトは「まだまだ周囲の人々が困っているのに、自分だけが楽しむようなことはできない」などと「3」的な行動を拒絶するかもしれない。でも封印してきた自らの「3」を上記のように刺激してみることで、むしろ健全な「3」が健全な「6」につながるということを実感できるようになるだろう。

これは一例だが、子供の頃に「3（無恥）」でいることを認めてもらえず、常に叱られてばかりで、徹底的に「6（羞恥）」を叩きこまれた教育家庭育ちのヒトは、当然ながら大人になってから「6」を大いに発揮し、それを自他に強く課していくこととなる。そうなると今度は周囲のヒトの「3」的な行動や態度に対し、強い敵対心を抱くようになり、自らのイライラをぶついたりもする。でもそれは、相手の「3」が憎いというよりも、自らが子供の頃に認めてもらえなかった「3」を、周囲のヒトが平然と発揮していることへの「羨望」だったりする。

■ 「5」と「4」について

「5」は、安定した四角形から一つの点が飛び出すイメージから、自由や冒険などを表す。五つの点と線から構成される五角形は両手両足を大の字に伸ばした人間そのものであり、そして人間は五本の指を使って様々なものの形を変えることから、変化・破壊をも表す。また、四大元素の一つ加わった、天界を構成する第五元素「エーテル」のイメージからも、自由に活動するイメージが強調される。

対する「4」は、四つの点と線で構成される四角形、つまりは人間生活の基盤であり（建物・敷地・家具・書物などなど）、このことから基盤・安定などを表す。また「4」は、結合を意味する「2」の平方であり、立体における最小限界も四面体（三角錐）であることから、維持や保有をも表す。更に角張った隙の無い形から、真面目さや頑固さのイメージにもつながる。

この両者には四大元素における「土」を当てはめており、奇数（動的・混沌・チカラ）である「5」は「動の土」、偶数（静的・秩序・カタチ）である「4」は「静の土」と表現している。

「5」の「動の土」は喩えるなら、決して動かぬものと思われていた山や大地が、轟音を立てて崩れ落ちるイメージであり、決して変わる事のないものと思われていた確固たる秩序に対して、堂々と反旗を翻す「革命」の象徴ともいえる。

「4」の「静の土」は喩えるなら、人類の生活を支える揺るぎない大地や、実りをもた

らす山々のイメージであり、何があってもそこから動くことなく、先祖代々の土地や伝統を守り抜こうとする「継承」の象徴ともいえる。

またこの両者には、ユングの類型論における「感覚」をあてがっており、更には「body（体）」のイメージも与えているが、これは両者における判断の根拠が「感覚」そして「body（体）」で表されるような、体感覚や肌感覚（ピリピリする空気感、何ともいえない違和感など）で得られた情報がベースとなることを示している。

一覧表には様々なワードが並んでいるが、奇数である「5」は「**壁**を破り出て、束縛物から自らを遠ざける」、偶数である「4」は「**ルールや領分などの「壁」の中で自らを守り抜く**」、これらがキーワードとなる。

常識・規則・習慣などをコツコツと守ることで、自他に安心をもたらす「4（ルーティン・日課）」と、そんな日常から飛び出して、ハラハラドキドキの冒険へ繰り出していく「5（アドホック・特別）」の違いとしてイメージしてもよい。

あえて危険なことにチャレンジすることで、自らのセカイを更新していく「5」だが、周囲から「そんな危ないことはやめなさい」などとたしなめられることにより、反転して「4」へと向かうことは想像に難くない。もちろん、日々の生活を安定させるためには、健全に「4」が機能することが欠かせないわけだが、もしこの「4」が強くなり過ぎたなら、周囲の変化にはあまり関心を持たず、自らの箱庭的なセカイを守ることばかりに汲々とするヒトができあがることになる。不要となった習慣をいつまでも変えることができず、変化を受け容れられないあまり、極めて意固地になってしまう、などの弊害がその一例となる。

また、自らの「4」が強過ぎるヒトの中には、自身を取り巻く理不尽に耐えるため、自己の肉体的感覚をとことん鈍らせることで、あらゆる困難に「気づかぬ振り」をするケースもある。自身の体調不良を無視して、日々の継続性を最優先させることも、行き過ぎた「4」のイメージとなる。

その反面、自らの「5」が強いヒトの場合は、偶数（静的・秩序・カタチ）的な圧力から逃れるために、自身の肉体的感覚をとことん鋭敏にさせることにより、事前に様々な束縛からの回避を試みることもある。ただし、当人を取り巻く環境や接する相手の偶数性が強ければ、それらからは「変なヒト」「無責任なヒト」などと評価されるケースもある。

なお、「5」のヒトが引っ越しや転職を繰り返すケースもあるが、これは別にそれらをやりたいからやっているとは限らず、自らの足りない「4」を補うため、つまりは自身にとっての真の「居場所」や安心できる「安全基地」を探し求める行為であったりもする。

■ 「7」と「2」について

「7」という数では、円（360°）を割り切れない（「7」以外の「1」から「9」、そして「0」なら割り切れる）。そのため、この数は無限の思考や哲学・探究・孤独などを表す。また、各地の宗教において聖数として用いられており、神秘・深淵なども表す。

対する「2」は、点と点で構成される線であり、また点が二つとなることで自と他という概念が生じる。そのため、一対一の関係性や協力・比較などを表す。また、無と有、陰と陽、生と死、善と悪など、「2」で象徴される様々な対観念がこの世界には多く存在するように、対立や境界なども表す。

この両者には四大元素における「風」を当てはめており、奇数（動的・混沌・チカラ）である「7」は「動の風」、偶数（静的・秩序・カタチ）である「2」は「静の風」と表現している。

「7」の「動の風」は喩えるなら、孤独な精神世界の奥底で激しく吹き荒れる大嵐のイメージであり、たとえどんなに絶対的な答えであっても、その正しさを自らの知性でしっかりと検証していこうとする「懐疑」の象徴ともいえる。

「2」の「静の風」は喩えるなら、空気中を静かに伝わっていく規則的な振動（つまりは言語としての声）であり、これを用いた情報伝達や万象の定義付けによって、ようやくにして得ることのできた答えを固く信じ抜こうとする「信仰」の象徴ともいえる。

またこの両者には、ユングの類型論における「思考」をあてがっており、更には「brain（脳）」のイメージも与えているが、これは両者における判断の根拠が「思考」そして「brain（脳）」で表されるような、自他が育んできた知性や蓄えてきた知識がベースとなることを示している。

一覧表には様々なワードが並んでいるが、奇数である「7」は「**安易に「線」を引かず、しっかりと検証を重ねていく**」、偶数である「2」は「**自他を繋ぐ（分ける）「線」を明確に引いていく**」、これらがキーワードとなる。

自身を取り巻く様々な定義・言葉・関係などが、真に信じられるものなのかについて深く検証しようとするのが「7（？・クエスチョン）」だとすれば、それらの定義・言葉・関係などを疑いもなく信じ抜き、更には強く固く結ばれようとするのが「2（！・エクスクラメーション）」だといえる。

「これってどうして〇〇なの？」などと、周囲のオトナに対して矢継ぎ早に質問を繰り返したり、はたまた誰ともつながることなく、独りで精神世界に没入したりすれば、親や学校などからはそんな「7」を鎮めて「2」を優先させるよう指導されることだろう。そうすると今度は自らの「7」を封印して「2」を強めることとなるが、それも強くなり過ぎれ

ば、あらゆる定義や人間関係という「答え」に縛られ続けるヒトになってしまう。親や友人から言われたとある一言が、それこそ呪縛となって当人の動きを封じるケースなどは、まさにその典型であるともいえる。

他者とのつながりを「ホース」に、その中で交わされる言葉のやり取りを「水流」に喩えたならば、いわゆる「2」が強過ぎるヒトは「ホース」が外れることばかりを心配し、肝心の「水流」についての確認を疎かにするケースがある。人間関係を大事にするあまり、言葉の詳細な中身やその意味よりも「誰が語ったのか」という事実のみに焦点を当ててしまうパターンである。場合によっては関係維持を優先するあまり、その発言自体を「なかったことにする」ケースも見受けられる。それに対して「7」が強過ぎるヒトは「水流」に気を取られるあまり、肝心の「ホース」が外れていることに気づかないケースも見られる。誰が語ったかよりも「何を語ったか」についての検証を優先し、相手と交わした言葉の真意や解釈の考察に没入するあまり、その答えを導き出せないまま気づかぬうちに、相手との関係がしぼんでしまう現象ともいえる。

「7」の強いヒトが本当に信じられる「答え」を見つけるべく、ありとあらゆるものの検証を試みるケースは少なくなく、様々なモノやヒトに「それってホント？」などと疑いの目を向けていく。でもその果てに、本当に信じられるモノやヒトが見つかったなら、今度は一気に「2」へと反転し、すっかり信じ抜いてしまうケースも多い。自らの「7（懷疑）」機能を十二分に発揮して導き出した「答え」であるが故に、その「答え」を否定することは再びいつ終わるとも知れない「7（懷疑）」な作業への逆戻りを意味する。それを避けるためにも、大きく「2（信仰）」へと舵を切っていくことになる。

なお、漢字などの文字がひとまとまりのものとして認識できず、構成要素のみをバラバラに認識してしまう現象のことを「ゲシュタルト崩壊」と呼ぶが、「7」が強過ぎるヒトの中には、自らを取り巻くセカイやその意味が突如としてバラバラになるような体験をするケースもある。これは無意識下における「7（懷疑）」のオーバーロード（過負荷）であるともいえる。

■ 「9」と「0」について

「1」から「8」全ての性質を含む「9」は、全体・混交・充溢・宇宙などを表す。また、子供や喜びを表す「3」の三乗でもあり、無上さや無垢をも表す。更に、「9」に「0」以外のどんな数を掛けても数字根は「9」となるため、普遍や遍在（ユビキタス）も表す。図形にすると九角形だが、それを遠くから俯瞰することで「円」と捉えることもできるため、二一七的な永劫回帰や輪廻なども表す。更には自我や始まりの「1」から一番離れている数であるため、無我や終焉、曖昧さ（自明である「1」との対比）や放棄、自己犠牲・博愛精神なども表す。

対する「0」は、まさに「無」のシンボルであり（むしろ「無」のシンボルでしかない）、虚無・消滅・透明などを表す。

奇数（動的・混沌・チカラ）でもあり偶数（静的・秩序・カタチ）でもある「9」は、四大元素たる「火」「水」「土」「風」の全て、そしてユングの類型論における「直観」「感情」「感覚」「思考」の全てが統合されたイメージであり、それはすなわち「自然」そのものを表す。その全てがまさに「自然」の一部であり、分ける必要がない（ヒトは理解のために分けようとするが）くらいに混じり合った状態であるともいえる。

先のようにユングの類型論の四種が混じり合った状態であるため、「9」における判断の根拠となるのは「直観」「感情」「感覚」「思考」のうちランダムとなるが、二つ以上が同時に根拠となるケースもある。その場合は複数の根拠によって自身が混乱しやすくなり（この混乱は自覚しにくい）、結果として意味不明な言動につながることもある。

ちなみに生年月日から「0」を導き出すことはできないため、いわゆる「基本数」が「0」のヒトは存在しないのだが、上述のエニアグラムの手法（当人に「数」を選ばせる）では「0」のヒトが存在し得る。

また、「基本数」が「9」のヒトは、同時に「0」という「双子の数」を持つこととなるため、「9」のヒトのリーディングは「9」と「0」という二つの数をベースとして行うことになる。

一覧表には様々なワードが並んでいるが、奇数でも偶数でもある「9」は「**全てのことを時の流れに委ね、自然に忘れていく**」、そして「**この世界には「意味」を自由に与えることができる**」、これらがキーワードとなる。

対して奇数でも偶数でもない「0」は「**主体である自らが消えようとし、忘れられようとする**」、そして「**この世界には「意味」など全く存在しない**」、これらがキーワードとなる。

「9（全）」は仏教における「空（くう）」のイメージにもつながってくる。つまりは「全ては因縁で満ちており、自我や実体は存在しない」という考え方である。何も無いように見えて、実は満ち満ちているのが「9（全）」という「空（くう）」のイメージである。対する「0（無）」は同じ漢字でも「空（から）」のイメージとなり、あくまでも全く何も無い「虚無」のイメージとして捉えることができる。

一覧表では「9（全）」と「0（無）」に、相対するものとしての「 \Leftrightarrow 」、そして同じものとしての「 $=$ 」という、一見矛盾するマークを付けている。これは先述の「九去法」、つまり単数変換の際に「9」を「0」とみなす計算法からも導き出せるが、具体例としては「空気」を挙げるとわかりやすくなる。ヒトは普段から「空気」が満ちた空間で生存して

いるが、この存在について通常は意識することなく日々を送っている。もちろん高山や深海などの「空気」が足りない環境になれば、否が応でも意識せざるを得ないが、問題なく呼吸できるくらいに「空気」が満ち満ちていれば、ヒトの意識からは消え去ってしまうだろう。これがつまり「9（全）」＝「0（無）」となるイメージにつながっていく。

かのニーチェは「ニヒリズム（虚無主義）」を二つに分けて捉えた。一つは「全てのことに意味を見出せず、何も信じていることができない状況への絶望・疲弊から来る自棄な生き方」を選ぶ「弱さのニヒリズム（消極的・受動的ニヒリズム）」、もう一つは「全てのことに意味も価値もないのなら、自らがそれらを自由に与えていけばよいという前向きな生き方」を選ぶ「強さのニヒリズム（積極的・能動的ニヒリズム）」である。逆数秘術（アンビバレント・ヌメロロジー）における「0」は前者であり別名「暗いニヒリズム」と、そして「9」は後者であり別名「明るいニヒリズム」とイメージすることができる。

「意味も価値もないなら、もう全てがどうでもいいや…」などと「0」的に自棄になるのではなく、ならばいっそのこと「全てに意味も価値もないならば、まるで白紙のキャンバスに自由に絵を描くように、このセカイに意味も価値も与えつつ、のびのびと大らかに生きていこうではないか！」などと「9」的に鷹揚に人生を歩んでいくことを選んでいく…「9」という「数」は、そのことを強く教えてくれる「数」でもある。

「1」から「8」までの全ての「数」のイメージを内包するのが「9」であり、これは当人のバラエティ豊かな性質を表している。これは「オールマイティ（万能）」という評価につながる反面、自己評価としては「器用貧乏」というレッテルを貼りやすくなることにつながる。

そしてこのように、様々な性質が自らの中に満遍なくあることは、自身の「個性」を定義する際の妨げとなりやすい。なぜなら、自らの性質がある程度偏って存在（過剰・不足というでこぼこ）している方が、そのぶん「個性」として定義しやすくなるからだ。満遍なく性質が存在するからこそ、かえって自己の「個性」に乏しさを感じてしまい、すると今度は「自分探しの旅」を繰り返すことにもつながっていく。

この「自分探しの旅」の途中で、自らの「個性」の定義づけに成功したり、あるいは自らの性質のバラエティさを素直に認めること、つまりは「ありのままの自分」でいることを赦すことができたなら、その人生は迷走から解放されることだろう。しかし、それがうまくいかないままだと、ある時を境に「0」への反転を迎えるケースも多い。突如として湧き上がるリセット願望、物事に対する冷淡な諦めモード、無感情・無反応・無行動への移行、このセカイから消え去りたいという消滅願望や透明化願望、などが代表的な「0」状態だ。これらの「0（暗いニヒリズム）」から「9（明るいニヒリズム）」へのリニューアルを果たすことが、そのヒトの人生にとっての当面の目標となる。

先述の通り「9」は、自我や自己を表す「1」から（一桁の数の中で）最も遠く離れた数であるため、自我がぼんやりした状態である忘我や無我、更にはまるで自己を亡き者とし

て扱うようなレベルの自己犠牲精神をも表す。そんな「9」のヒトは、周囲のため・自身のため、などといった区別なく、無意識のうちに自己犠牲的な行為に及ぶケースもある。もちろんこれは、自身の中に眠るアガペー（神の愛）的な博愛精神の発露だったりもするのだが、実際には以前の「0（何も無い・無個性）」な自分に戻ってしまうことへの「恐怖」から、自己犠牲を自らの「唯一の武器」として半ば強引に定義するケースだったりもする。

この「9」のヒトが持つ「博愛精神」は、自分と他人を分け隔てることなく、みんなを愛していくイメージだが、それゆえに周囲からは「0」への反転として受け止められるケースもある。つまりは「誰のことも真剣に愛してはいないのではないか？」というイメージを与えることもあるということだ。「愛」で全てを満たしてしまうと、肝心の「愛」が消えたように見えなくなってしまいうイメージで捉えるとよい。

■FAQ

Q1：「数」に相性はあるのか？

A1：逆数秘術（アンビバレント・ヌメロロジー）においては、特に「数」の相性というものの規定していない。奇数（動的・混沌・チカラ）と偶数（静的・秩序・カタチ）とは、互いに相反するイメージではあるが、それ故に互いにフォローし合える「数」であるともいえる。その「数」同士が衝突するのか、はたまた連携するのかは、取り巻く環境やシチュエーションによって様変わりするため、いわゆる「相性」という概念で乱暴にまとめることはできないと考えている。

Q2：「11」「22」などの「マスターナンバー」は用いないのか？

A1：現代数秘術（モダン・ヌメロロジー）の祖であるバリエッタが、他の数とは異なり「次元の違う数」として特別扱いした「マスターナンバー」。これは人生に強い生き辛さを感じているヒトにとっては避難所として機能することもあるが、その反面でエゴの肥大化や選民思想につながる危険性も秘めており、逆に「私はいたって普通の人生を歩んでいるのに、どうしてこんな仰々しい数を持っているのか？」などと、この概念自体が本人にとって重荷になることもある。

また、生年月日の単数変換時の計算法の違いによって、「マスターナンバー」が出たり出なかったりする弊害もあり、更には「11」となるヒトよりも「2」となるヒトの方が多いという矛盾（特別である以上は「希少」である必要がある）も抱えているため、逆数秘術（アンビバレント・ヌメロロジー）においては「マスターナンバー」を用いず、あくま

でも一桁の「ルートナンバー」のみを用いている。

Q3：実際に生まれた日と、役所に届け出た日、どちらを採用すべきか？

A3：実際の誕生日（生まれた日）と届出日が異なる場合、普段自らの生年月日として意識している（誕生日として祝う日）日を採用するとよい。実際の誕生日（生まれた日）でなければならない、などということはない。

【付録】

以前に作成した「ピュタゴラスとその教団の思想」について箇条書きでまとめた資料を、せっくなのでこの場に載せることにする。

ここではピュタゴラスの頃の「数」のイメージも取り上げているが、一番最後に取り上げたのは、本書や現代数秘術における「数」のイメージとの乖離が大きいため、読者に混乱を招かないようにするためである。

■ピュタゴラスについて

- 紀元前 582 年生～紀元前 496 年没、古代ギリシアの数学者・哲学者
※釈迦が紀元前 5 世紀前後の人物なので、概ね同時代に活躍
- エーゲ海東部のサモス島出身（近隣に著名な数学者のタレス在住）
→タレスは紀元前 585 年 5 月 28 日の皆既日食予言でも知られる
- 彼自身は書物を遺しておらず、弟子や後世の哲学者などによる伝聞でしか知る由もないが、概ねわかっているのは 20 年の放浪の後に故郷へ戻るも、学問研究に適した地を求めてイタリア南部の都市クロトンに移住し、哲学と宗教の学派を立ち上げた（いわゆるピュタゴラス教団）ということ
- やがてこの教団は数百人の信者を集めるに至るも、入団テストに落とされた人物が報復のためにクロトン市民を扇動、彼らの焼き討ちに遭った教団は壊滅し、ピュタゴラス自身も殺されたという
- 教団内でピュタゴラスは神格化されていたこともあり、彼にまつわる伝説には事欠かない
 - ・ピュタゴラスは全く別の場所にもかかわらず、同日同時刻に現れた

- ・彼が川を渡った際、川に「やあ、ピュタゴラス」と挨拶された
- ・男が犬を叩くのを見て「犬を叩くのをやめなさい。
あの犬は私の友達の魂であり、彼の声が聞こえる」と言った

- ピュタゴラスは大の豆嫌い（そら豆とも）と言われているが、教団内においても豆の禁食令が出ていたとされている（併せて菜食も奨励されていた→ピュタゴリアン）
※アリストテレスは上記の理由について「宇宙創成の瞬間に人間と同時に生まれた可能性があるから」「豆の形が生殖器に似ているから」などを挙げている
- なおアリストテレスは『形而上学』において、ピュタゴラス教団（学派）が数学の発展に著しく貢献したことは認めているが、彼らの持つ「数が万物の構成要素である」という考え方に対しては容赦のない批判を展開している

■ピュタゴラスの思想（と呼ばれているもの）

- 彼が唱えた（とされている）のが「アルケー（万物の根源）は数である」という思想であり、あらゆるものは数によって成り立っているという考え方
- 古代ギリシアにおいては様々な哲学者が「アルケー（万物の根源）」を定義した
→ミレトスのタレスは「水」、ヘラクレイトスは「火」、
エンペドクレスは土・水・火・空気の四大からなる「リゾーマタ」…などなど
※これらはいずれもアリストテレスの『形而上学』で紹介されている
- ピュタゴラス（ないしその教団）は、弦の長さの比が「整数」の時に、振動する各弦が「協和音」を生じること気づいたという（オクターブは2：1、完全五度は3：2、完全四度は4：3など）
※下記「テトラクテュス」はこれら「完全協和音」の象徴でもある
※鍛冶屋の打つハンマー同士の共鳴から法則を発見した、という話もある
- また天体同士も「整数比」に基づいて運行していると捉え、その様を「天球の音楽（ハルモニア）」と呼んだとされる
- 彼（または教団）は「整数（特に自然数）」である1～10、特に1～4の数を重んじ、更には「10」を完全な数として捉え、10個の点を三角形の形に配置した「テトラクテュス（四数体）」を教団の紋章にしたという（以下の図）
 - ・ ※この図は1から4までの数が上から並べられており、これらの
 - ・ 数を操作することで1から10までの全ての数を導き出せる
 - ・ (1+4=5、3+4=7など)
 - ・ .

- ピュタゴラス教団において整数同士の調和や整合性を重視し、完全数（ピュタゴラスが名付け親とされる）や友愛数を特に重んじたとされるが、教団メンバーが「無理数（ $\sqrt{2}$ など）」を発見した際には、この数の存在を隠蔽するだけでなく、口外しようとする者を海に突き落としたとされる
→いわゆる「ピュタゴラスの定理（三平方の定理）」に伴う整数的宇宙観の矛盾
- オルフェウス教の影響を受け、魂の不滅性や輪廻転生を基本理念に据えた上で、魂の清め（カタルシス）によって個人の魂を救済することを目的とした
→牢獄である肉体を離れて禁欲的に生き、音楽を純粋な知性で聞き分けることで達成

■ピュタゴラス教団（及び学派）における数のイメージ

- 教団内では「二元論」的に数を捉え、10個の基本的な対立項目を用いたとされる

有限	奇数	一	右	男性	静止	真直	光	善	正方形
無限	偶数	多	左	女性	運動	屈曲	闇	悪	長方形

- 奇数は分解できないため本質的に男性の数、そして神々しい数（天の数）であり、対する偶数は分解できるため、女性の数・儂い数・世俗的な数（地の数）と捉えられていた
- ピュタゴラス教団にかかわらず、古代ギリシアにおいて「1」はあまりにも自明な不変の原理（全てのはじまり）であったため、数としては扱われていなかった
→つまり数は「2」から始まる（但し後述の『数論』では「3」より始まる）
→この考え方は12世紀の『サレム写本』や16世紀の数学者の中にも残っている
- イアンブリコス（245年～325年、ピュタゴラス主義の要約者として知られる）の『数論』において、「1」とは「モナド（単純者・一者）」であり、他の数も含むすべてのものに「モナド」としての「1」が含まれているという（以下は『数論』による解説であり、以降は「新ピュタゴラス主義」と呼ぶべきかもしれない）
- 「1（モナド）」は何者の支配も受けず、自足し、永遠に変わることはなく、それはひとえに「神」のような存在である。更には「1（モナド）」を「ヌース（知性）」にもなぞらえ、ピュタゴラス学派はこれを「真の存在（実在）」「理性」「真理の原因」「単元」「模範」「秩序」「和合」「大きなものと小さなもの間の均等なもの」「強さと弱さの間」「多数の中の中庸」「切迫したいまのいま」「船」「戦車」「友」「幸福」などとも呼んだとされる

- 「1 (モノド)」は数ではなく、更にはあらゆる属性 (奇数・偶数等) をも持ち合わせているが、『数論』においては「2 (ダイアド)」も数扱いを受けておらず、その理由として「2」は二分すると二つの「1 (モノド)」にしかならず (つまり不揃いには分けられない)、分けたものの属性が判然としないから、などと説明している
- 『数論』によると、ピュタゴラス学派の人々は「2 (ダイアド)」という名は「月」にこそふさわしいと捉え、他の惑星と比べても多く没する様 (月の入りが多い) や、月が半々にされ二つに分けられる様を「2」に当てはめたとされる
- 「2 (ダイアド)」は「ドクサ (臆見)」、つまり「感覚による不確実な認識や知識」を表し、対する「1 (モノド)」は「エピステーメー」、つまり「知性や理性による確実な認識や知識」を表すとされる
- 感性的な存在である女性を「ドクサ」である「2」と捉え、それに「ヌース (知性)」である「1」を加えた「3」が男性であり、人間の完成形を表すものとして捉えていた
- 「1 (モノド)」はあらゆる数の原理を含んだ種子であり、次の「2 (ダイアド)」は数へと向かう小さな前進であったが (しかしまだ数とはいえない)、更に次の「3 (トライアド)」でもってようやく数の王国へと入ることができ、そしてこれは「1 (モノド)」の持つ潜在性を現実や拡大へと前進させる原因となる
- 「3 (トライアド)」には「思慮分別」や「智恵」の意があり (思慮や智恵によって過去・現在・未来という三つの相を概観するため)、更には「友情」「平和」「調和」「満場一致」の意味もピュタゴラス学派は与えたという
- また「3」には「全体」の意もあるが、これは「始・中・終」や「過去・現在・未来」という三つ組における「全体」として扱われている
- 「4 (テトラド)」は「知識」を表す智恵の土台であり、「1」の「算術」、「2」の「音楽」、「3」の「幾何学」、そして「4」の「天文学」という計4つで構成される → これらの全てを駆使することにより、段階を踏みながら全存在への哲学的な探求へと向かっていき、そしてそれは教団の究極的目的である「魂の救済」へとつながっていく
- また「4 (テトラド)」は「世界」「(世界の真実の姿としての) 真理」「正義」を表す数でもあり、それは四大 (火・空気・水・土) や四つの季節、四つの感覚 (決まった器官を持たない触覚を除く)、四方 (東西南北) などでも表される → 「テトラクテュス (四数体)」を「世界原理」であると教団が捉えたことも大きい

- 「5 (ペンタド) 」は「公正」や「公平」を表し (1~9 のちょうど真ん中に位置しているから)、「6 (ヘクサド) 」に対しては、この数が「完全数」ということであつてか (初期のピュタゴラス学派がこれに気づいたかはともかく)、宇宙と靈魂とのより「完全」な「調和」を意味するものとして据えたという
- また「5」は「結婚」も表すが、これは先述の「2 (女性) 」と「3 (男性) 」を合わせることで導き出せる
- 「2 (女性) 」と「3 (男性) 」を掛け合わせることで生まれる「6」は「友愛」を表すが、これは足し算よりも掛け算の方が「より高度」なものであり、男女がただ結びつく「結婚」よりもプラトニックな友愛の方が「より高尚」なものと古代ギリシアにおいては捉えられていたからとされる
- 「7 (ヘブドマド) 」は『数論』において「いかなる母親からも生まれなかった《処女》である」と述べられており、ピュタゴラス学派は「アテナ (処女でありゼウスの頭 (モナド) より生まれたから) 」や「重大な時」「好機」などの名で呼んだという
※この「7」の孤立性は、1~10 のうちで「7」だけがどんな数の倍数でも約数でもないことから導き出せる
- ピュタゴラス学派のフィロラオス (紀元前 470 年頃~同 385 年頃) は「算術上の大きさが「4 (テトラド) 」によって三次元となったあとでは (「4」は最初の立方数)、「5 (ペンタド) 」には可視の自然の質と「色」があり、「6 (ヘクサド) 」には報酬があり、「7 (ヘブドマド) 」には知性と健康と我々が「光」と呼ぶものがある。そして次は「8 (オグドアド) 」と共に、事物は愛と友情と知恵、それに創造的な思考を手に入れる」と述べたとされる
- 「9 (エニアド) 」は「和合」「限定」「太陽」などとも呼ばれたが (物事を取りまとめる数)、更には「争いの払底」や「同化」とも呼ばれた
- 「テトラクテュス (四数体) 」を足し合わせると生まれる「10」は正に「完成」を表す数であり、それは宇宙の根本原理であり「宇宙そのもの」であると捉えた
→そのため教団内においては「テトラクテュス (四数体) 」同様祈りの対象となった
- 古代ギリシアも含め、多くの文明では「0」の概念がなかった
→「0」が使われていたのはバビロニア文明、マヤ文明、そしてインド文明とされるが、しるし・数字・数の機能を持ち合わせた「0」を編み出したのはインド人 (5 世紀頃には存在) とされる
- 特に古代ギリシアの場合、その宇宙観が「無」というものの存在を認めないものであったため、「0」という概念が生まれなかったのも無理はない

■ピュタゴラス以前の数について

- アルゼンチンのアビポネ族（19世紀初頭に消滅）、ベネズエラ～ブラジルのヤノアマ族、南オーストラリアのルミララ族などは全く「数」を知らず、一つのものや一対のもの、最高でも三つからなる集合しか把握できないという
- ブラジルのバカイリ族は「1 (takale) 」と「2 (ahage) 」という数詞を用い、手の指も駆使して「6」までは数えられるのだが、彼らは「ahage・ahage・ahage」と唱えることで「6」を表現する。「3 (ahewao) 」という数詞もあるにはあるが、大抵はそれを「takale・ahage」で表現し、「6」よりも大きな数はただ単に「大きな数」や「たくさん」という言葉で全て同じように表現する
(カール・フォン・デン・シュタイネンの研究調査による)
- 上記のような村社会から都市や都市国家への発展に伴い、数を用いる商取引も盛んとなり、また記数法や度量衡、天体の運行計算などに用いるために（つまり農業の発展に伴い）数学も盛んとなっていった（シュメールからバビロニアを中心に発展した数学等）
- 様々な「数」と「神秘」を結びつける試みは、様々な文明や文化において行われてきたが、いわゆる「数」という《概念》そのものを信仰の対象として「神秘化」や「神聖化」したことが、ピュタゴラスの大なる功績と言えるのかもしれない

※参考文献

「数の魔力 一数秘術から量子論まで一」

ルドルフ・タシュナー著、鈴木 直 訳、岩波書店刊

「数のはなし 一ゼロから∞まで一」

バニ・クラムパッカー著、斉藤 隆央・寺町 朋子 訳、東洋書林刊

「数の歴史」

ドゥニ・ゲージ著、藤原正彦 監修、創元社刊

「数秘術大全」

アンダーウッド・ダッドリー著、森 夏樹 訳、青土社刊